

平成 28 年度

国際理解教育研究大会報告書

第 24 回岡山県国際理解教育研究大会

岡山大会

「世界の中の日本 学び合う国際理解教育」



期日：2017（平成29）年1月31日（火）

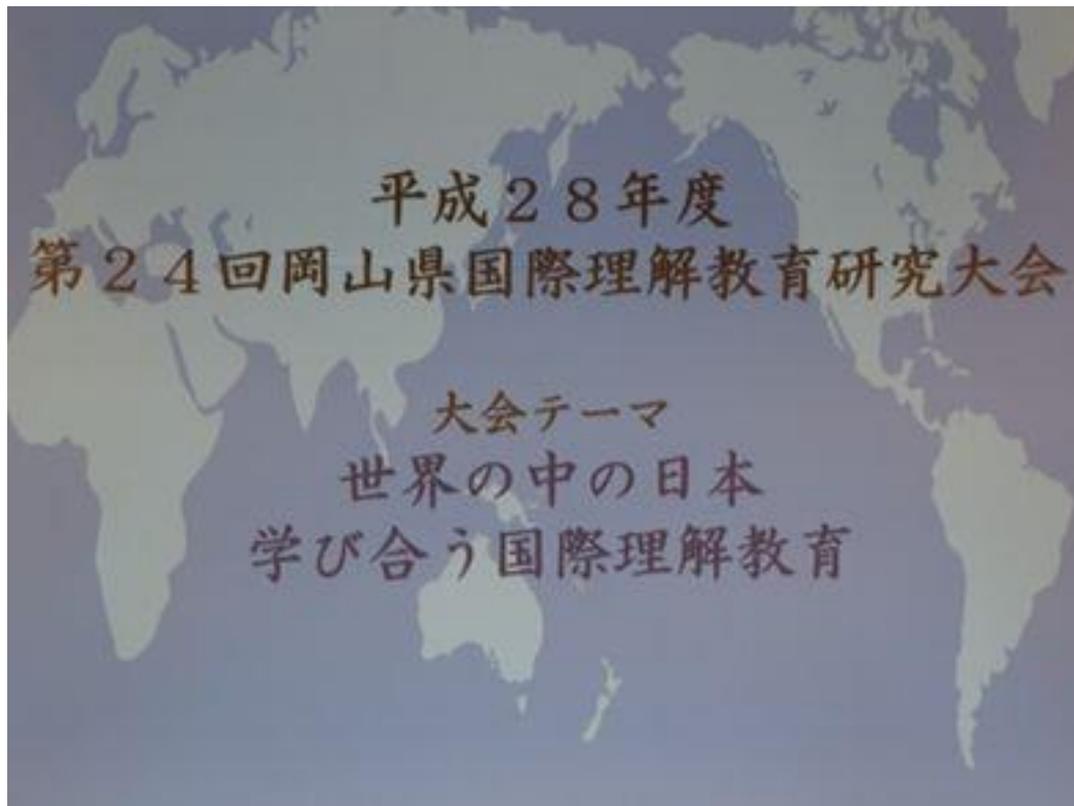
会場：くらしき健康福祉プラザ プラザホール

倉敷市笹沖 180 番地

主催： 全国海外子女教育・国際理解教育研究協議会
岡山県国際理解教育研究会

後援： 岡山県教育委員会 岡山市教育委員会
倉敷市教育委員会

第24回研究大会報告書



目 次

○研究大会を終えて（会長挨拶）	・・・・・・・・・・	1
○実践報告	・・・・・・・・・・	2
浅野 智宏教諭（岡山市立三勲小学校）		
坂江 至教諭（真庭市立八束小学校）		
江尻 寛正教諭（倉敷市立連島南小学校）		
○講演「現場に神宿る ～マチプロは何を目指したか～」	・・・・・・・・・・	6
講師 山下 陽子 先生（倉敷南校等学校長）		
○平成28年度研究課題	・・・・・・・・・・	12
○各国の紹介・展示コーナーなど	・・・・・・・・・・	14
○あとがき	・・・・・・・・・・	19

平成28年度

第24回岡山県国際理解教育研究大会

開催要項

1 日程 平成29年1月31日(火)

13:30	14:00	14:15	15:15	15:30	16:30
受付	開会行事	実践報告①②③	情報提供	講演	閉会行事

2 実践報告

	主題	発表者
実践報告① (国際理解教育)	オーストラリアの小学校との交流	浅野 智宏教諭 (岡山市立三勲小学校)
実践報告② (海外子女教育)	日本人学校での取り組み	坂江 至教諭 (真庭市立八束小学校)
実践報告③ (外国語教育)	思考力を伸ばす小学校英語の実践	江尻 寛正教諭 (倉敷市立連島南小学校)

3 講演 「現場に神宿る ～マチプロは何を目指したか～」

講師 山下 陽子 先生 (倉敷南校等学校長)



4 その他

○情報提供（15：15～15：30）

全国海外子女教育・国際理解教育研究協議会から、国際理解教育の現状や、海外日本人学校・補習校の様子などをお知らせします。

○展 示

日本人学校派遣者が海外から持ち帰った物や写真を展示します。

○日本人学校へのアプローチコーナー

日本人学校に派遣を希望されている方、お気軽にご相談ください。

5 地 図



倉敷健康福祉プラザ

研究大会を終えて

岡山県国際理解教育研究会 会長 服部 誠

(岡山市立財田小学校長)

とてつもない権力をもった1人の人間の「つぶやき」1つで、世界の多くの国の方針が揺れたり、資産が変動したり、自由な移動が止められたり……。情報通信技術の発展、グローバル化という名の下で世界が揺れています。ひょっとしたら、とんでもない恐ろしい未来に踏み出しているようにも思えます。

そのような世界情勢の中、私たちは真の国際人を育成すべく地道に努力しているわけであります。真の国際人となり、国際社会を主体的に生きて行くには、自国を誇りに思い、日本人そのものの豊かな人間性の素晴らしさを認識し、自尊心の持てる人間を育成することが重要であると考えます。そして異なる文化をもつ人々との相互理解を図り、互いに受容し合い、価値観を尊重し合う態度を育成することも重要です。

世界の情勢の変化、グローバルな捉えかたの重要性、思考や判断の上立った実践力・行動力などの21世紀型の能力を児童や生徒に育てるには、教員の力を培う必要があります。そのための機会の一つに海外派遣という研修があると思います。

岡山県でも毎年数名の教員が世界各地の在外教育施設に派遣されています。時代は違えど、私たちが派遣された頃と同じ心境で、チャレンジ精神をもって飛び立って行きます。派遣先にいる児童生徒や現地の方々と共に、多くの学びを得ていると思います。その1部を昨年度G7教育大臣会合またG7子どもサミットが開かれたこの地倉敷で、本日3人の先生がそれぞれの視点からのすばらしい実践を発表してくれました。お忙しい中準備をしていただき、心より感謝申し上げます。

また、倉敷南高校の山下陽子校長先生に講演をしていただきました。グローバルなものの考え方、豊かな国際感覚でのお話を聞かせていただき、われわれ国際理解教育を担うものにとって大きな示唆をいただきました。

最後になりましたが、公私多忙の中お越し頂いた倉敷市教育員会の先生方、ご参会の皆様、準備、運営に関わっていただいた先生方すべての皆様に心よりお礼申し上げます。

平成29年2月吉日



実践報告① オーストラリアの小学校との交流

三勲小学校 浅野智宏 教諭

「こんな交流なら続けていけるな」と思える交流にするためにはどうすればよいかをさぐってみた。前半は実際の交流の様子について説明する。後半は、持続可能な国際交流について一緒に考えてみたい。

所属の三勲小学校が岡山市 ESD 世界大会し、オーストラリアの小学校との交流を進めた流れがある。1年目の交流では、相互に質問、メールで交流、学校紹介の動画など行った。今後の交流について模索していたところで、現地研修視察のための1名分の交流が決定した。平成28年11月に1週間。現地では学校視察・協議を行い、大学や環境センターへの視察・協議も行った。5年生同士の交流を計画。交流した学校は Groos View Public School (250名程度の児童が在籍)

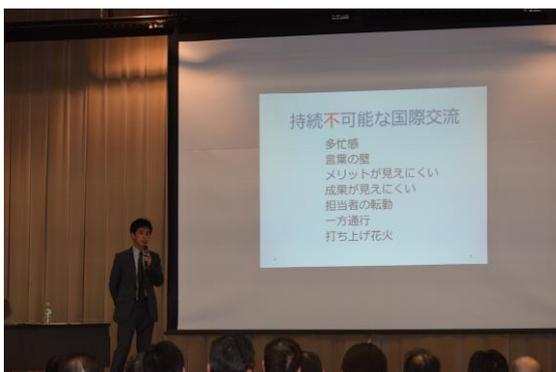
日本文化を勉強、週に1度の日本語の授業も行っている。アナスタシアさん（日本語が話せる交流担当教師）が窓口となった。

（現地視察の様子を動画と写真で紹介）相手校では日本語の歌も練習している。日本からは児童の英語での歌を動画で紹介した。スカイプを使って交流を計画していたが、交流当日にはネットの環境が悪くうまくつながらないトラブルもあった。質問コーナーでは、お互いにスカイプを使って「放課後は何をしていますか?」「ポケモンGoをやりませんか?」など質疑を行いながら交流した。その後、体育館に移動し、踊り、歌、ミュージカル、桃太郎の劇などを披露する全校児童によるウェルカムパーティーが開かれた。桃太郎のオリジナルストーリーを大事にしなが、オーストラリア風にアレンジされていた。

現地視察の中では40分の授業を担当した。今後も交流が続くようにするために「日本紹介」「日本文化の紹介」「三勲小学校の紹介」を中心に授業を進めた。

What Japanese students do everyday is→ A : Sumo B : Clean their class room C : Dance with teacher と質問してみた。日本では、AとCの回答は冗談とわかりきっているものでも、オーストラリアの子供たちは間違えて選んでいる子も多かった。日本の子供たちが、毎日、自分たちで掃除をしていることは大変驚いていた。また、日本の給食も驚きと興味を持って話を聞いていた。オーストラリアでは自分たちで弁当を持ってきてランチルームで食べていた。箸の使い方を比べるために、豆つかみの国際対決を行った。日本の子供たちは30秒で6粒ほど。オーストラリアの子供たちの代表3人が挑戦したが、一粒だけであった。チャレンジをたたえて日本の給食エプロンをプレゼントした。また、持ち込んだ筆ペンを使って習字の体験をしてもらった。また、三勲小学校の総合的な学習で取り組んでいる「能」も体験してもらった。浴衣を持参して試着してもらい、オーストラリアの子供たちにも能に挑戦してもらった。

また、日本の子供たちが大好きなもの（お気に入り）を英語で紹介する様子の動画を視聴してもらった。



最後に、お互いの違いについて話をした。「Difference is problem?」と尋ねると、オーストラリアの子供たちは大変反応がよく、「No!NO!」と答えてくれた。金子みすずさんの「みんなちがってみんないい (We are all difference and all wonderful)」の詩を紹介した。

では、持続不可能な交流の原因はなんだろうか。原因はいろいろあると思う。たとえば、忙しい、言葉の

壁、メリットが見えにくい、成果が見えにくい、担当者が移動してしまう、交流が一方通行になってしまう、一度きりの打ち上げ花火的になってしまうなどが考えられる。そこで、どうすれば持続可能な交流にできるだろうか。考えられる原因は大きく3つ。

- ① 挨拶などのコミュニケーションから共同学習に進めていく必要がある。・・・長く続いている例→オーストラリアと韓国は「渡り鳥」とテーマに共同学習を進めることで相互の情報を学習に生かしながら学びを進めている。必然性もあり、メリットも感じられる。
 - ② ICTの普及は不可欠（オーストラリアのICT環境は大変進んでいて、日本はまだまだだなぁと感じた。）
 - ③ 打ち上げ花火から線香花火に・・・地味だが手軽な交流を続けていく
- そこで大切になってくるのが「+Australia」の考え方。新しく何かをやり始めるのではなく、今までやっていた学習・活動に一工夫を加えるという考え方。

- 総合：能学習+Australia（「どうして能を学ぶのか」とオーストラリアの子供たちに尋ねられることで、必然性が生まれる。）
- 外国語活動：夢の時間割+Australia（「I study japanese」の動画を導入に使うことで、その後の学習に意欲が生まれる。）
- 社会科：国旗の意味+Australia
- 図画工作科：好きな動物の絵+Australia
- 音楽：世界の楽器+Australia
- 国語：漢字の成り立ち+Australia（アボリジニの文字）

など

「+Australia」は交流学习と言えるのかという疑問が生まれる。こちらが「+Australia」で学びを進めるように、相手も「+Japan」の視点で学習を進めている。そこではお互いのメリットに向けて協力し合える可能性がある。外国語学習を共通のテーマとすることでお互いのメリットを生かしながら持続可能な交流が続いていくのではないか。今後も持続可能な国際交流の学習・活動を検討していきたい。

実践報告② 「1095日のキセキ」シンセン日本人学校での実践

真庭市立八束小学校 坂江 至 教諭

2012年4月からの3年間シンセン日本人学校での体験をもとに、帰国後、所属小学校での全校発表の実践をもとに報告。2枚の写真を見せながら、「どちらも中国という国の様子なんだよ」というところからの導入。地図を示しながら、中国はどこかを確認。日本と比べてみると、数字は分かりにくいけど北海道と大きさを比べると、中国がいかに大きいかがよくわかる。中国の有名な地、実際に訪れた地を中心に紹介。水墨画でも有名な桂林。棚田の写真、生まれてからずっと髪を切らない桂林の女性を紹介。広州はタワーや広州酒店を紹介。香港はブルースリーやディズニーランド、夜景、花文字などを紹介。澳門（マカオ）は世界遺産やカジノを紹介。その後、坂江自身が住んでいたシンセンを紹介。人口は約1200万人。高い高層ビルと古い街並みが混在。とても立派な市役所。広い空港。街を歩いていると路上の散髪屋。1回100円程度。薬局の前では有料の体重計。暑い地方で生息するアフリカマイマイの写真を紹介。大好きだったことは？朝飲茶。おなかいっぱい食べて一人数百円。クイズ形式で果物（ライチ、マンゴスチン、ドリアン、ドラゴンフルーツ等）を紹介。シンセン日本人学校の校歌を紹介。2008年に開校。作詞・作曲は大黒摩季さん。開港当時の保護者のつながりで校歌の完成披露会には本人も来校した。校門は保安員に警備されている。あまり新築をすることがないためもともオフィスビルだった建物を改築しているため、8階建。法律の関係で6階以上には児童は上られ



ない。職員は 20 数名で、現地スタッフも勤務している。運動場はすごく狭い。そのため、近くの小学校の運動場を使って運動会を実施。練習は事前に 2 回程度。水泳の授業は近くのマンションのプールを活用。深さは 140cm 程度。プラスチックの椅子を沈めて安全管理を図った。修学旅行は 6 年生が西安へ。日本とのつながりも確認した。中学部は北京へ。



日本各地から中国の地へ集まっている学校。いろいろな人との出会いがすべて「キセキ」として大切な思い出となった。サッカーやマラソンなどのスポーツや釣りなどのレジャーを通して交流を図った。旅行先、お店でもたくさんの中国人と出会った。

「キセキ」を手に入れたのは、日本人学校へ行きたいと思った自分の決意。子ども達にも何かに挑戦してみたいと思ったら、その先に失敗があるとしても、チャレンジすることが大切だと伝えた。

帰国してみて改めて感じているのは「知る」ということ。赴任前と帰国後の中国に対する自分自身の気持ちの変化。報道を超えるような自分の目で見る事実があること。赴任当時は日中関係が悪化した時期ではあったが、同じマンションの中国人に親切にしてもらった経験や電車やバスでは子どもに席を譲ってくれることが多かった。報道を否定するつもりはないが、報道はあくまでも報道。自分の目には報道をはるかに超える力がある。子ども達にも自分の目で見て自分で体験することを大切にしてもらいたい。

実践報告③ 「思考力を伸ばす小学校英語教育の実践」

倉敷市立連島南小学校 江尻寛正 教諭

サンパウロ日本人学校で 3 年間生活。言語はコミュニケーションのツールとして「伝わること」がとても大切だと感じた。日本にいと中学入学と同時に学習の対象として英語を生部が、正しく学ぶことよりも相手が何を言おうとしているか、自分が何を伝えたいかがとても大切になってくる。たとえば、ポルトガル語で指示を出してわからなくても、体全体を伝えて話せば、指示は伝わる。コミュニケーションは自分が伝えたいことを言葉も含めて体全体で表現し、伝え合うことが大切。まさに指導要領で示されている 3 つの柱と一致する。①学びに向かう力・人間性、②生きて働く知識・技能、③思考力・



判断力・表現力の育成。英語の単語をいくつ知っているかよりも、人と関わりたいというモチベーションを外国語活動の中では大切にしていきたい。言葉のやり取りが、単なる言葉のやり取りで終わるのではなく、実際に人と人とのやり取りの中で大切にされることが重要なのではないかと。生きて働く知識技能というのは、ただ単に英語を覚えている覚えているだけではなく、あの人はこう言っているのかな？とか、どうやったら相手に伝わるだろうか？とか、そういうものが大切になってくるのではないかと。自分自身中学校時代に、R と L の発音はとても大切だと習っていたが、実際の会話の中では伝えるという視点ではそれほど大切ではないと感じている。あまりに発音に偏りすぎたり、文法にこだわりすぎたりして、伝えることが大切にされない状況がある。だからこそ、新指導要領では「生きて働く」という言葉が明記された。とても大事になってくるのではないかと。思考力・判断力・表現力の育成では、意味のある内容がとても大切になってくる。一生使わないような英単語をテストに出るからたくさん覚えるというようなことは意欲につながらない。ほんとに子供が考えたい内容であったり、自然に疑問を持つような内容であったりすれば、学ぶ意欲につながりとても大切になるのではないかと。

では、今の外国語活動では実際にどういうことが行われているのか。全国では「Hi Friends」がテキ

ストとして使われ、キーワードゲームというゲームが爆発的な人気となっている。しかし、そこには生きて働く英語という視点が欠けている。続けても使える英語にはならない。フォニックスの学びも、子どもは楽しく学んでいるように見えるが、リピートには思考が欠ける学びとなるきらいがある。思考しながら外国語を使うという経験がとても大切になる。

では、思考しながら学ぶというのは実際の授業の中でどうおこなわれるべきなのかについて話してみたい。4つの場面が想定される。

- ① 相手意識・・・この人は何が好きなのか。と聞く前に相手が何が好きかをイメージすること、考えながら聞くこと。
- ② 推測・・・英語をどうやって使ったら相手に伝わるか、自分は単語を知らないんだけどどうにかして伝えたい、知らない単語だけど相手の言っていることはどういう意味かなという考えながら会話する力
- ③ 国際理解に関するところ・・・同じところもあれば違うところもある、違う国なんだけど同じところもある、など、国際理解はとても有効な思考の場面となる。
- ④ 意味のある内容で、新しい視点で物事を見る・・・今まで知っていそうだけど知らないこと（例えば信号機の色や並び）、そこには話を聞く必然性が生まれてくる。

ここでは、模擬授業を通して「考える英語活動」について紹介していきたい。

わからない時には→I don't Know. もう一度してほしいときには→One more time, Please. もっとゆっくりしてほしいときには→More slowly, Please. 授業の中で言いたい英語を新しく知り、実際に使ってみることで身につけていく。



「What is this?」「Its Humberger.」「How much is this?」を学んでいくとする。日本、中国、アメリカ、スイス、ロシア、ブラジルでビッグマックの値段が違うという情報をもとに、値段の並び替えをするように指示をするとそこには、「How much」のフレーズを使う必要性が生まれ、考えながら英語を学ぶ授業になる。（正解は、高い順に、スイス→ブラジル→アメリカ→日本→中国→ロシアとなる。※ビッグマック指数による）この段階で並び替えをした段階で授業を中断しようとする、子ども達は「いくらなの？」と自然に疑問をもち、値段を知

りたいと思うようになる。そこで「How much is this?」の表現を習うと、外国を意識し、生活を感じながら、英語表現を身に付けていくことができる。

英語活動では国際理解はとても有効な視点となる。2年生の国語で学習する「スイミー」英語の原著で読み聞かせをすると登場するマグロの向きが逆になっている。その向きに注目すると日本語の縦書きと英語の横書きに視点が向き、国際的な視野を持つことができるようになる。ただのリピートでなく、思考を活性化し、人と関わる中で使える英語を身に付けていくことが大切になる。

グローバル教育とキャリア教育とアクティブラーニングは同じ土俵の上にあるものと考えています。その中で一番危惧しているのは、現場で十分な議論がないまま一人歩きをしているのではないかということです。小学校で英語の授業が始まり、大学入試ではディスカッションが入るらしい、アクティブラーニングで授業でしなければならないんだと現場の教員がかなり踊らされている感じを受けています。浮き足立ってきている教員のことを考えながら、研究者も、そして役人も決して分からないところを、我々は知っています。

一番大切なのはスキルではなくて、ものを考える子どもをつくるということで、ものを考えるためには、何が必要か、今までの子ども達の力が今どれくらいなのか。その力で五分五分、何とか越えるかもしれないという学びの場はどの程度のレベルに設定したらよいか。勇気を出して背中を押してやる。それができるのは現場の教師しかいない。我々はプロの教師として、ここを押さえていきたいと考えています。

テレビのインタビューを見ていると、政治や経済についてマイクを向けられると、逃げる人が結構多いです。ところが、学校のことや教師、特に教師の不祥事のことになると、どうしてもライトアップされてしまいます。それは、日本は世界に誇る識字率で、まず学校に行ったことのない人はほとんどいません。そういう意味では素晴らしい国ですが、それぞれの体験に基づく学校のイメージがあります。多くの人達が学校のことや教師のことも知っていると思っっているんですね。でも、ここ10年20年の変わり様にはすごいものがありました。その中で、社会変革の波にさらされた学校や教師が、30年前と同じ訳がありません。30年前の学校のイメージを持った人と議論しても深まりようがないんですね。

先生方が社会の激変、メディアの学校バッシングにあおられた一般社会の批判にさらされて、いかに自信を失い、浮き足だって、腰が引けているのかを痛感しています。これまで、メディアや社会に対して作戦をもった説明や反省をしてきました。ちゃんとした支援をしてこなかった文科省、県教委、我々管理職の反省するべきところだと思っています。

0 グローバル教育とは何か

これから、私自身のキャリア教育を通して体感した5年間の取り組みについて、また、現場に神宿る研究者や学校現場を知らない人に、教育のことを任せておけないということについてお話しをしたいと思います。

グローバル教育とは何かと考える時に、英語力が大事ですが、相手のことを考えるなどの、もう一つベーシックなところでの鍛えが必要だと思っています。



これは電車内での化粧お断りのポスターなんですけど、周りに人もいないし、わりかし楚々としている感じで実害はなさそうなんです。そう考えると、ここに出てくる主人公の女性が電車内で化粧をしている人を見ていて、私がみっともないと思って嫌な気持ちになるから嫌なんだ、そんなことはやめなさいという論理だと思われま。この辺りがグローバル教育の第1「多様性の受容」に関わってるところだと思います。多様性の受容というのは、どこまで我慢するかという具体的なことです。これは我慢できるけど、これは許せない。許せなかったら、そこから合意形成が必要となります。「申し訳ないけど、粉がこちらに飛んでくるから化粧はご遠慮いただけますか。」と言うところから始めたらよいのではないかと思います。これはそう言った意味でマニュアルのない対応になります。つまり、グローバル教育というのは、英語教育や海外共有推進ではなく、柔軟性とか合理的思考力、表現力などの育成がまず大事だと考えます。これは小中高同じことが言えるのではないのでしょうか。そして、そ

ういった教育を推進するためには、自分の頭でものを考える教師、覚悟をもった教師を育てる、これが非常に難しいことではありますが、重要なことであると思っています。現場では指示待ちの若者が増えてき

ていますが、そういった中で、これから話す「町プロジェクト」とは、ある意味、教師育てのプロジェクトであることをご理解下さい。

I 「町プロ」は何を目指したか

・学びの動機の希薄化

ネット社会の中に生きる子ども達。昔と非常に違うなあと思うことが多いです。我々が学生の頃は、勉強する意義なんかを漠然と分かっていたように思います。良い学校に行けば何か良い暮らしが出来るんじゃないかという期待感がありました。しかし、今の子ども達には、その期待感が薄くなっているのではないかと感じています。これは専門高校よりも普通科高校の子ども達の方が高いように感じます。



これは、文科省の比較で日本青少年研究所が日本・アメリカ・中国・韓国の普通科高校生を比較したものです。例えば、高い社会的地位に就くに「そう思う」と応えた高校生の数、日本は63%、本校では57%と低くなっています。また、お金持ちになりたいという項目でも、日本は79%、本校では69%と低くなっています。

富や地位というものが学びの意欲につながりにくい生徒がかなりいるという中で、学びに向かわせる新

たなしかけとして、本校では社会との関わりの中で観念的に理解していたものを自分のこととして理解させようという「学びの志」を育てることを考えました。

・倉敷（地域）と共に育てる生徒（みらい）

グローバル教育というのは、身近なものから普遍に突き抜けていくものであると考えています。地域を知ることが、ある意味グローバル教育の第1歩であると考えています。倉敷の企業さんは、海外に事業所をもっているところが多く、グローバルなところが多いです。天領で町衆文化ということだけでなく、現在も生きている「民活」精神、自助・共助・公助、先ずは自分たちで考えようという良い面を感じたので、これを未来の市民たる生徒達の学びに育てたいと思いました。

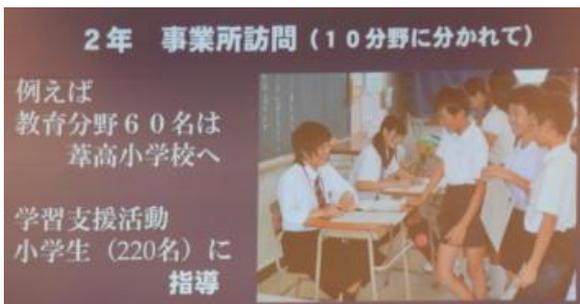
そこで倉敷商工会議所に相談をしたところ、快く協力してくれ、1年生ではフィールドワークを行うことができました。本校では事前に課題を考えて、それをリサーチしていきます。事前の学習によって、自分なりのイメージをもっていく。自分なりの課題を発見していく。そこから始まっていくというのが大きい結果を生むと思っています。



これは1年生のラーニングカフェの様子で、銀行マン、行政マン、お医者さんなどの近所の方に来ていただいて、生徒達が準備してきた課題や質問をぶつけていくというものです。

大原美術館は倉敷の財産であり、世界への窓です。素晴らしい世界の作品があり、あそこから世界を考えることができます。地域からいただいた課題をポスターセッションの形で、1年生が学校祭で提言をしています。関わった町衆の方が提言を聞いてくれ、プロからのかなり厳しい意見もいただいています。1年生が作った提言の中で、子育て応援カードというものがありますが、倉敷市長にも提言をさせていただきました。

2年生では、10分野に分かれて事業所訪問を行っています。生徒達が実際に小学校に行ってみて、低学年に教える難しさ、限られた語彙の中でどうやって説明するのか立ち往生した時に、小学校の先生方が助け船を出して下さって、先生のすばらしさを知ったそうです。



それから昨年カンボジア研修を企画実施いたしました。なぜカンボジアかといいますと、1つは発展著しい東南アジアの中でどこかに行かせてあげたいと思いました。発展途上というのは、言葉ではなくりきれない現実、行ってみると一瞬で分かります。また、本校2期生で国際平和維持活動中に殉職した岡山県警の方を記念した「ハルスクール」というものがカンボジアにあります。そこを訪問し、知識としてしか考えることのなかった、戦争とか平和とか集団的自衛権とか、憲法9条改正の是非とか、まさに現実のことなんだと感じさせたかったです。



研修では、現地のアンコール高校で英語によるプレゼンテーションとディスカッションをしました。有力者の子どもが多く、ダブルスクールをしている生徒がかなり多く、英語はペラペラでした。発展途上国の高校生ということで、うちの生徒はなめていましたので、ディスカッション中で、ほとんどの生徒が立ち往生していました。これは、貧しい国という先入観を払拭する素晴らしい経験だったと思っています。

また、王立プノンペン大学でもディスカッションをしましたが、ここでは日本語学科の生徒達でしたので、ディスカッションを深めることが出来ました。

ハルスクールでは、校庭の外には絶対に出ないようにいわれました。柵の外には地雷の心配がありますといわれ、平和・平等などの大切さが脅かされた、まがまがしさが残る場所にいき、平和の大切さが一瞬で理解することができました。さらに、生徒達自身は自分の課題が見えてきた経験となりました。



2年生はこういった取り組みを通して、11月のポスターセッションで発表をしています。ここには1年生、町衆、保護者が参加します。研究内容は出来るだけ、コンテスト、大会等で発表するようにしています。やはり、背伸びの場に参加することで学びも深まりまし、評価されると生徒達のやる気もです。

3年生ですが、9月の学校祭で全員参加のディベート大会を行います。問題提起に関しては、地域の方にも参加をお願いしています。この年は憲法9条改憲の是非について話し合いましたが、決勝戦ではかなりヒートアップした論争が出来ました。聞きながらメモをとり、批判的な思考をして、論理的に反論していく生徒がいました。非常に短い時間の中で、相手の論旨をつかまえて、反論していく。そして最終的にジャッジをする。これは、学びの意味が分かる素晴らしい活動だったと思います。



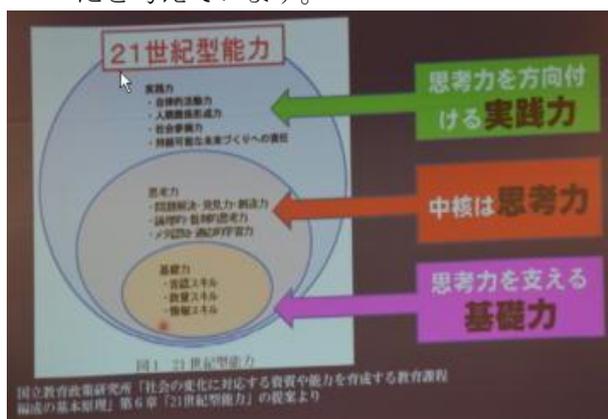
II 21 世型能力と倉南ルーブリック

・目標共有化

観念的理解から「厚み」のある理解へですが、「厚み」のある理解とは、東大のグループワークの手法を研究している方が言っていたことで、応用のきく理解のことです。私たちの目指す理解というものは、そういったものであると思います。

さて、町衆プロジェクトは何を目指したかということですが、端的に言いますと、もの考える生徒です。これはグローバル人材育成の第1歩

だと考えています。



それを支えるものとして、21世紀型能力開発の共有化、定着化をさせるために倉南ルーブリックというものを作りました。これは、国立教育政策研究所が作ったものですが、真ん中に思考力があります。そして、思考力を支える基礎力、思考力を方向付ける実践力ということで理解しています。基礎力の部分は、授業で育成する言語能力、数量、情報といったスキルであり、知識・技能として思考力を支えるものと考えています。これがなければ、思考力はいきません。実践力は自律的な活動力、人間関係形成力、社会参画力といった、自分、相手、社会

をターゲットにしていくものと考えています。

中核となる思考力の内容ですが、問題発見・解決能力、論理的・批判能力、メタ認知だと考えています。メタ認知とは、自分自身を客観視することです。この3つを育成していきたいと考えました。

そこで、本校では大学の先生に協力していただき、ルーブリックを試行錯誤して作成しました。レベル1は、1年生が中学校から入ってきた段階で、一応ほとんどの子が出来るというものを想定しています。そして、レベル5は、本校の生徒が3年生の最後に何とかうまくいった子だけがたどり着くことが出来るレベルです。生徒達が自己評価しながら、レベルを上げるためには何が必要なのかが分かるように、表によって見える化しています。

町衆の方に、本校ではこんな風に目標を立てて、こうなるように活動をしているんですけど伝えると、町衆の方は、まず構えが違ってきます。企業にも講演に行くことが多いのですが、よく出る質問が、インターンシップを引き受けたんですが、学校にどのようにしたらよいのでしょうかと質問をすると、「まあ、適当に。」と言われます。しかし、我々は教育の専門家ではないので、適当になんか出来ません。実際にどのようにしたらよいのでしょうかという質問が一番多いです。短い時間で、どれだけ結果を出すかというのは、その意識にかかっているのだと思います。大人同士が共有した理念をどれだけもっているかということが大切だということです。

・三位一体教育改革

三位一体改革と題していますが、大学入試を挟んで、大学教育と高校教育が変わりつつあります。今の中学三年生が最後のセンター試験受験者なんですけど、難関大学を中心に後期の人数をAO入試にうつってきています。その入試問題の中で、受験の教科・科目以外に何を学んできたか、そこを子ども達が説明する必要が出てきています。論理的思考力や表現力を問うという意味で大学入試が変わってきているんです。

III 「深い学び」という視点

・アクティブラーニングの三要素

深い学びという視点。今後も含め、意義のある改革にするためには、何より現場の意識改革が大切です。意識改革とは何かというと、最初に言ったアクティブラーニングという浮き足だった状況から「現場に神宿る」に戻らなければならないということです。

アクティブラーニングについて、文科省は①深い学び②対話的な学び③主体的な学びを挙げています。対話的な、主体的な学びばかりがグループワークやディスカッションという形で手法ばかりが先行している感じを受けます。しかし、一番大事なものは、深い学びです。知識をつなげていくことによって、観念的な学びではなく、厚みのある理解へとつなげていくことが大切です。教科ならではの思考の枠組みが深い思考へとつながる。アクティブラーニングでこれまでの教科が否定されているように思うかもしれませんが、日本の教育の見方、考え方はとてもすぐれています。子ども達のモチベーションを上げ、OECDでも世界で何位にも入るような結果を出しているのです。教師として誇りをもっても良いと思います。

全国学力状況調査ですが、なぜ秋田が学力が高いのか。教育というのは、押しつけ力だ。大人

同士がこれは良いと思うものを押しつけることが大切であると、ある校長が言っていました。

秋田は長らく全国学力状況調査で1位でしたが、大学合格率は40位なんです。ベネッセの担当者が、小・中が1位なのに、高校は何をしているのかとよく叱られると言っていました。これは高校の先生が怠けているわけではありません。秋田は十数年前から徹底してグループ学習をしています。グループ学習は底上げに効果があります。底上げをすると平均点が上がります。しかし、平均点が上がっても、吹きこぼれる子が出てきます。そういった子を引き受けて3年間で学力を伸ばすことは難しいです。ここで言いたいのは、平均点比較でどの県がすぐれているという言い方をするのは乱暴な話だということです。



・教科ならではの思考の枠組み「見方・考え方」を活かす

初の18歳選挙権ということで、高校は大変でした。世間では、ゆがんだ政治的教育が行われるのではないかと不安に思われる方も多かったようですが、それは、昔のイメージが強いからだと思います。

今年の参院選で感じたのは、現場の課題は教師は政治的中立ではなく、もっと別の所にあるのではないかとということです。ホームルームで教師が、これをしたら選挙違反だと伝えると、まじめな生徒は町でのビラにも手を出さなくなる。これをみて、アクティブラーニングで目指す、もの考える生徒と対局になるのではないかと思います。主権者教育というのは、社会の課題について様々な立場の人がいます。そう言う考え方を知りながら、自分ではここはこうだけど、ここはこの人が良いよねという判断、選択をしていく力だと思います。授業の中でどう取り上げていくのかということですが、持っている知識を主権者としての選挙権を行使する態度につなげていくのもアクティブラーニングだと考えます。

IV 「社会に開かれたカリキュラム」

・「社会の教育資源を活かす」 \longleftrightarrow 「社会に学校教育を説明する」

これは文科省が教育改革の目玉にしているものです。こういふと、学校の方からの社会の教育資源を活用するというふうに捉えられるというのは一方通行です。社会に学校教育を説明する。うちが町プロをしているのは、地域のちゃんとした大人が地域のものを考えて、損得の分かる大人が学校に入り込んで、今の学校って自分たちの頃の学校とは違うんだなあと感じてくれることが大切だと考えているからです。



社会の側でも、子ども達が企業にインタビューすることで、改めて考えさせられることがあったと社長さんが言っていた。そう考えると、地域が得るものは大きいと思います。子ども達が、倉敷の未来を考えることは権利であると考えています。

・「世の中をより良くする」ことが目標

私は社会と学校は、ものごとをより良い方向にするということを目指して子ども達を育てていけばよいと考えています。アクティブラーニングがつくろうとしているのは、考える子どもです。クリエイティブな市民作り、クリエイティブな教師が増え、クリエイティブな公務員が増え、クリエイティブな医者ができ、クリエイティブな商店者が増えれば、世の中は絶対に良くなります。学校の社会科という

2016年11月5日(土) LS宣言

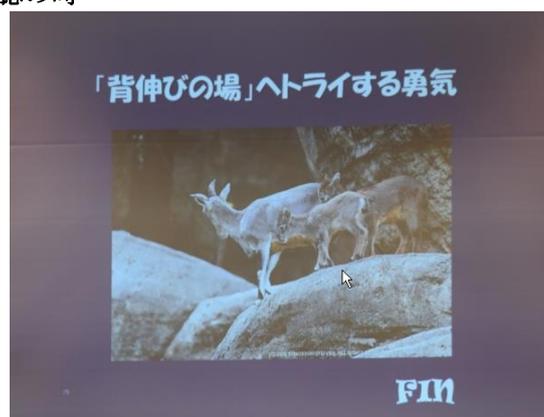
- ① 大人は本気の思いを伝えてほしい。
- ② 大人と意見交換する場がほしい。
- ③ そのために私たちは力を付けたい。
大人はその環境を整えてほしい。
- ④ 私達の意見を社会に反映してほしい。

のは、気働きの出来る市民を育てていくのが最終目標だと考えています。

・**学校のダウンサイジング＝家庭・学校・地域の役割再確認の時**

町プロは教師育ての場であると思っています。それを通して子ども達が育っていきます。教師集団はまれに見る同質集団です。我々教師の中では分かって、社会一般の人には分からなことが結構あります。教員の不祥事で、教員がたたかれることもあります。どの集団でも変わった人はいます。一人が不祥事を起こすことで、教師全体が悪く言われ、腰の引けた教員がつくられます。そして、最終的には教育が意味のないものになっていく。そこを知ってもらいたいと思っています。

企業の方達は受容力の高い方が非常に多いです。その人達を教育の味方に付けていくことが大切ではないでしょうか。学校と社会が手を取り合って子ども達が勇気を出して飛び出していけるような場をつくっていきたくて考えています。



1 研究課題

- | | | | |
|----|----------------------|--------|-----------|
| I | 多文化理解〈・人間理解（人権） | ・多文化理解 | ・世界の現実理解〉 |
| II | コミュニケーション〈・コミュニケーション | ・外国語教育 | 〉 |

2 研究課題設定の背景

(1) 社会からの要請

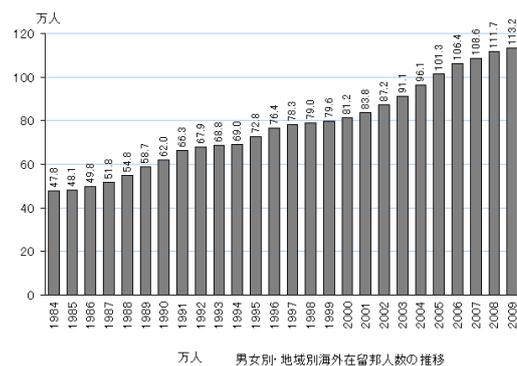
外務省「海外在留邦人数調査統計」によれば、
 我国の領域外に在留している日本人の数は、その
 増加率が減ってきており、放物線の頂点に近づい
 ている様相をみせているという。

しかし、微増とはいえ、海外在留邦人が110
 万人を越えている状況は、我が国と諸外国とのつ
 ながり深いという事実には変わりはない。

また、いくつかの企業が社内公用語を英語にす
 ると決定したことが大きなニュースとして取り上
 げられたり、いわゆる「若者の内向き傾向」がと
 りざたされていたりもしている。

私たちは、すでに「地球規模化=globalization」している国際社会の一員であり、「国際理
 解教育」なくして我国の教育は語ることはできないのである。

海外在留邦人数の推移



資料 外務省「海外在留邦人数調査統計」

(2) 新学習指導要領からの要請

中央教育審議会の答申によると、「21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる『知識基盤社会』の時代である」と言われている。「知識基盤社会」の特質として、「①知識には国境がなく、グローバル化が一層進む、②知識は日進月歩であり、競争と技術革新が絶え間なく生まれる、③知識の進展は旧来のパラダイムの転換を伴うことが多く、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断が一層重要になる、④性別や年齢を問わず参画することが促進される」などとされている。

そのような「知識基盤社会」を生きる子どもたちが自己責任を果たし、他者と切磋琢磨しつつ一定の役割を果たすためには、基礎的・基本的な知識・技能の習得やそれらを活用して課題を見だし、解決するための思考力・判断力・表現力等」が必要であると同時に、世界や我が国社会が「持続可能な発展」を遂げるためには「共存・協力」も必要であるといわれている。

「国境のない知識」「グローバル化」「パラダイムの転換」「共存・協力」などというキーワードは、まさしく「国際理解教育」がめざすものと同一である。

(3) 教育現場からの要請

「生きる力」を培う領域として華々しくデビューした「総合的な学習の時間」であったが、「学校行事・イベントの時間としての扱い」「教師の企画力不足」などと、創設当時の元気はどこに行ってしまったのかという感が否めない。「各教科での知識・技能の習得と総合的な学習の時間の課題解決的な学習や探求学習との間に段階的なつながりが乏しい」との指摘もあり、もう一度「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」という「生きる力」について考え直すことが求められている。「総合

的な学習の時間」の一領域として例示された「国際理解」についても例外ではない。

(4) 岡山県国際理解教育研究会の研究の経緯からの要請

本研究会は、今まで研究課題を「人間理解（人権）」「多文化理解」「世界の現実理解」「コミュニケーション」「外国語教育」という5つの研究課題を掲げて実践を積み重ねてきた。

その結果、「人間理解（人権）」「多文化理解」「世界の現実理解」の3つのテーマには、「違いを認めるとともに、同じ人間として共感をもってお互いの人権を尊重しようとする態度を育成する」という共通点があり、「コミュニケーション」「外国語教育」の2つのテーマには、「自分の意見や存在に自信をもつためには、他から共感を得たり、互いの存在を認め合ったりすることが大切である」という共通点があることが明らかになってきた。

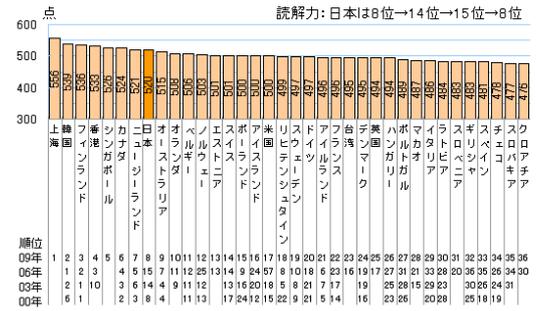
3 研究課題の具体化

前述の背景より、本研究会では、新しい研究課題を「多文化理解」「コミュニケーション」の2つに絞り、新たな実践に取り組んでいくこととした。

各方面からの要請を、実践を通してより確かなものとしていくことが求められている。

「国際理解教育」は、未来を生きぬく子どもたちを育成するために「自己との対話を重ねつつ、他者や社会、自然や環境と共に生きる、『開かれた個』」の育成をめざしてその具体化を図っていく必要に迫られている。

学力の国際比較(2009年)



資料 OECD「生徒の学力到達度調査」2009

各国の紹介・展示コーナーなど

帰国された先生方から、たくさんの資料を提供していただきました。眺めているだけで、その国の文化が見えてくるようです。











あ と が き

比較的暖かな今年の冬でしたが、2017年(平成29年)1月31日(火)倉敷健康福祉プラザで第24回岡山県国際理解教育研究大会が開催されました。当日、他の出張関係と重なりが多く、参加者が予定していた数より少なくなりましたが、「世界の中の日本 学び合う国際理解教育」をテーマに、倉敷市教育委員会教育部次長 渡邊俊一様をはじめ3名の来賓にお越しいただき、また、提案者や講演の先生の素晴らしい発表や、参加者の皆さんの熱心な討議が行われ、中身の濃い研究大会となりました。

今回の研究大会は、倉敷支部の担当で、授業公開を伴わない午後日程の開催で行われました。開会行事の後、3人の先生による実践報告が行われました。

実践報告Ⅰでは岡山市立三勲小学校の浅野智宏先生からは「オーストラリアの小学校との交流」をテーマに、国際理解教育の重要性について詳しく発表してくださいました。実践発表Ⅱは真庭市立八束東小学校の坂江 至先生から「日本人学校での取り組み」を主題に「1095日のキセキ」と題し中国の深圳日本人学校での体験をクイズ形式で発表してくださいました。実践発表Ⅲ？スペース有り：トルは、倉敷市立連島南小学校の江尻寛正先生が「思考力を伸ばす小学校英語の実践」と題し、これからの小学校の「外国語教育」をテーマに、いかに考えて英語を使用するかについて、実際の授業形式で大変楽しく実践発表をしてくださいました。3人ともそれぞれ、視点の違う観点からの素晴らしい発表でした。心より感謝いたします。

講演会では、倉敷南高等学校 山下陽子校長先生から、「現場に神宿る ～マチプロは何を目指したか～」を演題に、国際理解教育とか社会のグローバル化を考えるには、まず今の高校生に地域に出かけ地域のすばらしさを知り、そのことについて学校で「深い学び」「対話的学び」「主体的な学び」を行うことで、生きた教育を行っていることの発表を伺うことができました。21世紀を生き抜く生徒を育てようとする学校の意気込みを感じることができました。また、最近の高校教育の変化に驚き感動しました。

私は、今からちょうど30年前に、南米ベネズエラのカラカス日本人学校に赴任し、3年間を異国の地で暮らしました。ちょうど日本の高度成長期の終焉を迎えようとしている時期だったと思います。その当時は、100名近く在籍していた児童生徒も、今や10名を切っているようです。その分、東南アジアへの進出の方が増えているように思います。世界の情勢はどんどん変化しておりますが間違いなく、世界の国々はお互い理解しあって仲良くなり、国と国の距離は短くなっていかねばならないと思います。戦争の無い、平和な世界を願って、この岡山県国際理解教育研究会の役割も大きくなると思います。

最後になりましたが、本研究大会を開催するにあたり、ご後援頂きました岡山県教育委員会、岡山市教育委員会、倉敷市教育委員会はじめ多くの関係機関の皆様、忙しい中、発表をしてくださった3人の先生、山下校長先生、準備・運営の本会役員の先生、事務局の先生、参加して下さった全ての先生に心から感謝とお礼を申し上げます。

2017(平成29)年2月27日
副会長(備中地区担当)
高梁市立高梁小学校長 三村 秀樹

第 2 4 回
発 行
発行責任者
事 務 局
T E L

岡山県国際理解教育研究大会報告書
2017（H29）年4月1日
岡山県国際理解教育研究会
会 長 服 部 誠
岡 山 市 立 三 勲 小 学 校
（086）272-3141